論 文

ヘボン家の人々

中　島　耕　二

はじめに

スコットランドの宗教改革者ジョン・ノックス（John Knox, 1514？～1572）を語る時,「個人的な問題に関してあまり語りたがらないノックスの中に，典型的なスコットランド人気質が見出される」[1] と評されるが，同じスコットランド人の血を引くヘボン博士（James Curtis Hepburn, 1815-1911，以下ヘボン）も，こうしたことを好まない気質を受け継いでいた。それは，以下の実弟スレーター（Slator Clay Hepburn）宛ての書簡に良く示されている[2]。

グリフィスやその他の人々が，わたしの生涯と業績について，いろいろ君に手紙を書き送っており，わたしもこの種類の手紙を受け取っています。4，5年前に，死亡者の略伝を書くに十分な材料をグリフィスに書き送ったことがあるが，わたしは全くそうしたことを好まない。世間にもてはやされるに値しないと考えています。自分はただ普通の能力と学識をもった一個の人間にすぎない。他の人がなし得ないようなことを何もやっていないのです。もしわたしが何か成し得たものがあるとするならば，それは，一つの仕事を完成するまで，その一事に徹して守りとおして来たその辛抱強い勤勉さによるものです。自分は彼らの要望に応じたいとは思いません。

文中「4，5年前に，死亡者の略伝を書くに十分な材料をグリフィスに書き送ったことがある」とあるのは，ヘボンが1881（明治14）年3月16日付けで横浜からW・E・グリフィス[3] 宛てに発信した自伝的書簡[4] を指している。この書簡はグリフィスの求めに応じて書かれたものであるが，ヘボンの本心は気が進まないものであった。グリフィスはヘボンの没後すぐの1913年に，その伝記 *"Hepburn of Japan and His Wife and Helpmates A Life Story of Toil for Christ"*，The Westminster Press Philadelphia, 1913（佐々木晃訳『ヘボン 同時代人の見た』教文館，1991年）を刊行しているが，ヘボンの出自や家系に関する記述は，上述の書簡の内容を忠実に引用し，ごく簡単に触れているのみである。この点，同じグリフィスが1900年に出版したフルベッキ宣教師の伝記[5] と比べると，大きな違いが見られる。

実は，ヘボンがニュージャージー州イースト・オレンジでInkkyo（隠居）生活を送っていた1894年に，ヘボンに繋がるヘップバーン一族の『系譜書』[6] がまとめられ，私家版で115部が限定出版されていた。同書にはヘボン自身の詳しい経歴も含まれていることから，ヘボン自らが著者に情報を提供し，さらに同書一冊を所有していたことはほぼ間違いないと思われる。グリフィスはヘボンの没後，息子のサムエルの招きでヘボン旧宅を訪問し，その蔵書の少なさに驚いたものの日記やその他生前の資料を閲覧した上で，のちに日記等を借り受けているが，この時，当然この書物も目にしたはずである。もし，そうだとすれば，グリフィスがヘボンの伝記の中でその出自や家系について，ヘボンから受け取った自伝的書簡の内容を超えて触れなかったのは，やはり，ヘボンの遺志を尊重していたからと言えよう。

しかし，ヘボンを研究対象とする立場からすると，ヘボンの思いに反する行為ではあっても，ヘボンの人格形成に少なからぬ影響を与えたと思われる，彼の祖先や同時代を過ごした親類縁者の生き方について，よ

り詳しく調査することは，当然必要とされる作業と思われる。ちなみに高谷道男は『ドクトル・ヘボン』（牧野書店，1954年）で，ヘップバーン一族であるアメリカの銀行家，A・バートン・ヘップバーン（Alonzo Barton Hepburn）の伝記[7]を援用し，ヘボン自身による出自に関するその淡白な記述の空白部分を埋めている。

本稿では，先のヘップバーン一族の『系譜書』に依拠し，合わせて関連史料によって検証ならびに補足を行い，グリフィスおよび高谷が触れ得なかったヘボンの出自や家系をより詳しく観察し，若干の考察を加え「ヘボン研究」を深めたい。

1．遠祖ボスウェル伯爵

ヘボンに繋がるヘップバーン一族はスコットランドを起源とし，13世紀頃にはその姓がローランド地帯（Lowland）のスターリング，エディンバラ，グラスゴー等の都市部を中心に散見されるようになる。しかし，ヘップバーン姓の由来については，詳しいことは分かっていない。一般に，当時のサーネームは二つの川の名称から命名するという伝統があり，合わせて，クリスチャン・ネームが採用される以前は，多くの場合住んでいる地名を姓代わりに用いていたことから，ヘップバーン一族は恐らくヘボルン（Heborn）という名に相当する二つの川の近くに住んでいたものと推測される[8]。その姓はやがて時代と共に，Hebron，Hepborn，そして発音し易いHepburnへと変化していったと見られる。大陸のフランスでは15世紀から17世紀にかけて，d'Hebron，d'HepburneおよびEsbronと称する，上流階級に属する一族も見受けられた。スコットランドおよび北アメリカでは，この三百年間“Hepburn”が定着し，ごく稀に”Hepborn”と綴る姓が見られる。

13世紀当時のスコットランドでは，ヘップバーン姓を名乗る領主，

軍人，教職者（聖職者），神学者，詩人，判事，法律家，政治家等社会的に枢要な地位を占めるものが散見された。その後，16～17世紀の政治的，宗教的混乱を迎えた時代には一族の動向が捉え難くなったが，それでも，あるものはスコットランド女王と結婚し，あるものは高位の教職に就き，あるものはスウェーデン国王やフランス国王の臣下となり，遂にはフランスの元帥にまで出世したものもいた。一方で，かなり時代が下るが，ワーテルローの会戦でイギリス軍に参加し，ナポレオン軍と戦い顕著な武勲を挙げワーテルローのヒ―ローとなったものなど，ヨーロッパ史上に名を残した人々が少なからず見られた[9]。

中でもヘップバーン一族でヨーロッパ史上最も著名なのは，スコットランド女王メアリー・スティワ―ト（Mary Stuart, 1542～1587）の3番目の夫となった，第4代ボスウェル伯爵（Earl of Bothwell）のジェームス・ヘップバーン（James Hepburn, 1526～1578）である。ヘップバーン家は1480年代にボスウェル伯爵にのぼる前は，代々ハッディングトン（Haddington）周辺を領するハイル卿（Lord Hailes）であった。この領地にはスコットランドの宗教改革を進めたジョン・ノックス家が代々居住し，ハイル卿と封建的主従関係にあった。1562年3月，ボスウェル伯爵ジェームス・ヘップバーンは宗教改革者ノックスに初めて会い，その後，彼から信仰上の指導を受けていた[10]。

ジェームス・ヘップバーンの二人目の妻となった，スコットランド女王メアリーの生涯は，『悲劇の女王』として文学，演劇また映画等で物語風に広く語り繋がれているが，彼女が1567年7月に廃位させられた直接の原因が，このボスウェル伯のジェームス・ヘップバーンとの結婚にあったことで，皮肉にも「ヘップバーン」姓はスコットランド女王メアリーの廃位とともに，スコットランド史に永遠に残ることになった。

ジェームス・ヘップバーンは1562年3月，「ボスウェル陰謀事件」[11]を起こし，一時フランスに亡命したが，帰国後メアリーの信任と愛情を

得て，1567年5月15日に女王との結婚に漕ぎつけた。ボスウェル伯爵は直ちにオークニー公爵（Duke of Orkney）に陞爵した。しかし，女王メアリーはカトリック信者で，ボスウェル伯はプロテスタント信者という大きな問題があり，二人の結婚はカトリックおよびプロテスタント両陣営から反対され，6月15日に政敵の貴族たちが兵を挙げ，カルベリーの丘の戦い（The Battle of Carberry Hill）で女王メアリーは捕縛の身となり，ジェームス・ヘップバーンはノーールウェーに逃亡し，一時海賊を率いたが，デンマーク艦に捕えられ，長い牢獄生活の末1578年4月10日，ドゥラグスホルム城（Dragsholm Slot）内の独房でその生涯を終えた[(12)]。メアリーはその後脱獄に成功し，従姉のイングランド女王エリザベスのもとに庇護を求めて逃れ，18年間の軟禁生活を送ったのち，エリザベス女王廃位の陰謀への関与が発覚し，1586年2月8日，フォザリンゲイ城（Fotheringhay Castle）で処刑された。

ヘボンが同じファースト・ネームのこの遠祖について，成長の過程で聞かされて育ったかどうかは不明であるが，少なくとも学生生活を送る頃には口伝えによる先祖の知識は得ていたと思われ，ヘップバーン家がスコットランドの旧家であり，貴族階級に属していたことは，ヘボンの人生観に一定の影響を及ぼしたものと推測される。

このほかヘップバーン一族には，既述のように何人かの歴史上に名を残した人々を見ることが出来るが，ヘボンとの直接的な縁戚関係が不明であることから，本稿では彼らには触れず，ヘボン直系の人々に焦点を絞って行くこととする。

2．曽祖父サムエル・ヘップバーン

ヘボンの直系の祖先を辿ると，1600年代半ば頃の教職者Reverend John Hepburn of Keithに辿りつく。しかし，ヘボンに相応の影響を与

えた人物という観点からすると，彼がグリフィス宛てに発信した自伝的書簡の冒頭で，アメリカのヘップバーン家初代として言及した，曽祖父のサムエルから観察して行くことが妥当と思われる。

サムエルは1698年にグラスゴーの近く，恐らくボスウェル城内で生まれた。その生い立ちは詳しく知られていないが，かつての伯爵家の子弟として，しかるべき教育を受けた後，上流社交界の一員となり，職種は不明であるが事業家として相応の蓄財に成功していた。かなりの年配になった1746年にジャネット（Janet，旧姓不明）と結婚したが，ほどなく二人は宗教的迫害に遭いスコットランドを脱して，アイルランドのドニゴール（Donegal）州に移住した。夫妻はこの地で，ジェームス，長女（名前不明），ウィリアム，サムエルJr.およびジョンの四男一女を得たが，この地でもカトリックとプロテスタントの宗教対立に悩まされた。アイルランドに移住して二十数年を経た頃，アメリカに移民した仲間からその優れた自然環境および宗教上の自由に関する情報が届くと，サムエルは同地への移住を考え，そのため26歳になる長男ジェームスと18歳の二男ウィリアムをアメリカに派遣し，つぶさに現地の状況を調査することにした[13]。二人の息子は1773年の初めにロンドンデリーを出航し，ペンシルバニア州[14] フィラデルフィアに上陸した。彼らは直ちに同州の内陸部へ入り，その美しさと肥沃さで知られるサスケハナ渓谷（The Susquehanna Valley）に至り，その将来性に満足し，その旨父の元へ報告した。

サムエルは息子二人から連絡を受け取ると，直ちにアメリカ移住を決意し，まずサムエルJr.とジョンの二人の息子を連れてロンドンデリーを後にした。しかし，この時サムエルは75歳の高齢に達していたので，実際は二人の息子に付き添われてアメリカに移動したと言うべきかも知れない。サムエルはフィラデルフィアに落ち着きしばらくすると，妻のジャネットと長女を呼び寄せるため，1775年に四男のジョンをアイルランドに迎えにやった。一行はロンドンデリーからFaithful Steward

号に乗船し，順調に航海を続けニュージャージー州のAbsecom海岸に至った。ところが，その時激しいストームに遭い，乗船が砂浜に乗り上げて大破した。船客はボートで脱出を試みたが，ボートにも損傷があり，夥しい浸水が起こり，サムエルの妻と長女を含む女性たちの多くが溺れて命を落とした。本来，彼女たちは助かったはずであるが，その多くが財産化したかなりの金製品を身にまとっていたため，身体の自由を失い不幸に見舞われたと言われている。

サムエルはアメリカ入植後，約10年間フィラデルフィアにとどまり，その後サスケハナ渓谷のノザムバーランド（Northumberland）に長男のジェームスにしたがって転居し，そこで平穏な余生を送り97歳の高齢で1795年1月11日にこの世を去った。ノザムバーランド墓地に埋葬されている。

サムエルとジャネットの間には次の4男1女が与えられたが，サムエルの遺産は子供たちにではなく，孫のサムエル（ヘボンの父）に相続されたことが司馬純詩の調査によって明らかにされている[15]。その理由は不明とされているが，当時，少なくとも息子のジェームス，ウィリアムおよびサムエルJr.たちは，既に父に勝る資産を所有していたことから，遺産の相続を辞退したのではないかと思われる。

第１子　James（1747～Jan. 4, 1817）実業家・判事
第２子　娘，名前は不明（？～1775）遭難事故死
第３子　William（1753～Jun. 25, 1821）実業家・政治家・判事
第４子　Samuel Jr.（1755～Dec. 24, 1801）実業家
第５子　John（1757～？）不明

３．祖父ジェームス・ヘップバーン

祖父ジェームスは，その弟ウィリアムとともに，アメリカにおける

ヘップバーン家の基礎を築いた人物である。ジェームスはアイルランドのドニゴール州で父サムエル，母ジャネット（Janet）の長男（長子）として，1747年に生まれた。学歴等は不明であるが，早いうちから父の事業を手伝い，若くして経営者としての才能を発揮し，相応の資産形成に成功していた。1773年，26歳の時，前述のように弟のウィリアムとともにアメリカにわたり，ペンシルバニア州周辺の現地調査を行った結果，宗教的自由を実感し，また将来性の確信を得て，自身のアメリカ移住を決意するとともに，両親と兄弟姉妹を呼び寄せる手配をした。その過程で，母と妹を失うという悲しい出来事に遭遇したが，フィラデルフィアに住まいを構えると，やがて大がかりな不動産事業に乗り出した。

ジェームスがサスケハナ渓谷の美しい地形やその肥沃な土地に将来性を感じたことは既に触れたが，彼は弟のウィリアムとたびたび同地を訪れ，共同で，一件600エーカー（72万坪）にもおよぶ大規模な土地取引を開始した。やがて，ジェームスはサスケハナ河の北支流（North Branch）と西支流（West Branch）の分岐点に位置するノザムバーランドに関心を持ち，周辺の土地の購入を進めていった。

ジェームスはこの頃，時期は特定出来ないが1778～9年に，取引の拡大を図るためジョン・カウデン（John Cowden）とパートナーを組んで，Hepburn & Cowden商会を立ち上げた。ジェームスがノザムバーランドで最初に不動産取引を行ったのは，ノースウェイ通り（North Way Street）の2階建てのログハウスと共同住宅を，ベンジャミン・アリソンから30ペンシルバニア・ポンド[16]で購入したもので，不動産譲渡証書（deed book）の日付は1781年4月18日となっている。続いて，同年5月7日，同町の“out lot”をジョン・ロウデンから140ポンドで購入したが，その証書は当時の法廷のあったサンベリー（Sunbury）の記録簿倉庫に保管されている。

ジェームスは1781年12月17日，ニュージャージー州マウント・ホリー（Mount Holly, New Jersey）のメアリー・ホープウエル（Mary Hopewell）と結婚した。メアリーの祖母はフランスのノルマンジーに住むユグノーであったが，宗教迫害に遭いイングランドに逃れ，その地でベケット（Becket）と出会い結婚した。二人にはメアリーとエリザベスの二人の娘があったが，彼女たちは両親と別れアメリカにわたり，ペンシルバニア州ブリストル（Bristol）に住む伯父Dr. John de Normandieのもとで養育され，姉のメアリーはマウント・ホリーのダニエル・ホープウエル（Daniel Hopewell）と結婚し，そしてメアリー・ホープウエルの母となった。

ジェームスは結婚後一時，マンウント・ホリーに住んだが，在住期間を示すはっきりした記録はない。長男のサムエルは1782年11月5日に，この地で生まれたと言われるが，異説もある[17]。やがてジェームスは，フィラデルフィアから事業の拠点をノザムバーランドに移すことにしたが，この時，妻のメアリーと長男サムエルは，しばらくマント・ホリーのメアリーの実家に残った。当時，サスケハナ渓谷はまだ独立戦争の余波がくすぶり危険地帯とされ，また原住民のインディアンもしばしば近辺に出没し，示威行動を行っていた。

ヘップバーン姓が不動産取引を通じて，ノザムバーランドを含むポイント（Point Township）の町の記録に出て来るのは，1787年のことである。当時の文書記録は一年乃至二年遅れで編集されるので，ジェームスのノザムバーランドへの移住は，1786年若しくは1785年となる。従って，ジェームスがマウント・ホリーの妻子およびフィラデルフィアに残した，老父やサムエルJr. とジョンの二人の弟たちを呼び寄せたのは，どちらかの年以降と言うことになろう。この頃のジェームスの財産評価は，1787年分として自宅とその地所，他に土地や家作，牛数頭で合計576ペンシルバニア・ポンドとあり，翌年の1788年はそれに5年奉

公の家僕の評価額5ポンドが追加されている。

以後，ジェームスはパートナーのカウデンとともに，サスケハナ河西支流周辺のライカミング・カウンティー（Lycoming County）およびクリントン・カウンティー（Clinton County）を中心に，1794年6月4日にHepburn & Cowden商会が解散される日まで，一時は銀行業務にも手を広げ，大，小様々な規模の不動産取引を行った。この取引の中にはヘボンの生まれ育ったミルトンも含まれているが，中でも1788年4月に，そのミルトンに隣接したマディー・ラン（Muddy Run）の土地120エーカー（14.4万坪）を，トーマス・ポロック（Thomas Pollock）から購入した記録が目を引く。このポロックとは，後年，ヘボンがミルトンで医学の手ほどきを受け，ペンシルバニア大学医学部に進学するまで指導を受けたサムエル・ポロック医師および彼の弟でヘボンの妹サラ（Sarah）の夫となった，のちのペンシルバニア州知事ジェームス・ポロック兄弟の叔父である。のちに，ヘボンの医師志望や両家の間に縁戚関係が生まれた背景には，こうしたヘップバーン家とポロック家のつながりがあったのである。

Hepburn & Cowden商会が解散された2年後，1796年であるがこの年のジェームスの不動産評価は，8,000エーカー（960万坪）という膨大な数字が記録簿に残されている。その頃，ジェームスはノザムバーランドのノース通り（North Way）とデューク通り（Duke Street）の角の細長い建物に雑貨店を開き，一方で再び弟のウィリアムと共同で大きな土地取引に乗り出し，それはジェームスが亡くなる1817年まで続けられた。中でも興味深い取引は，1812年にラリーズ・クリーク（Larry's Creek, Lycoming County）の土地213エーカー（25.6万坪）を同地のジョン・ノックス（John Knox）に譲渡した物件である。このノックスは，スコットランドの宗教改革者でかつてヘップバーン家と主従関係にあった，あのジョン・ノックスの直系の子孫であった。

ジェームスは，その真摯な生活態度が評価されて1796年3月14日，ペンシルバニア州知事トーマス・ミフリン（Governor Thomas Mifflin）から，ポイントの町（ノザムバーランドを含む）の治安判事（Justice of the Peace for the township of Point）に任命された。彼がいつまでその任にあったかは不明であるが，不動産のブローカーが判事に任命された背景には，ジェームスが敬虔な長老教会信徒として教会奉仕に務め，町の人々からも信望が厚かったことが挙げられる。彼は父サムエルに劣らず信仰心も人一倍篤かった。それは，やや後年になるが，ノザムバーランドの町の形成が進んだ1811年10月1日，サスケハナ地区のアメリカ長老教会の中会（Presbytery）がノザムバーランドで組織化され，その第一回の会合がノザムバーランド長老教会で開催された時，近隣の13の長老教会から名高い牧師が列席する中，4人の長老の一人として出席し，そして，席上彼が中会の役員に選任されたことからも容易に確認できる。

ジェームスは，ある年齢から節目の年毎に，遺言書を書いて弁護士に渡していた。現在もサンベリーの町の記録簿倉庫にジェームスが死去する5年前に書かれた，1812年6月23日付けの最後の遺言書が保管されている。その要点は以下の通りである。

1．負債（の返還）と葬儀費用は自分の費用で賄う。

2．妻のメアリーには，ノザムバーランドの現在の住居，土地，家具，日常用品，食器，寝具，書籍，酒類の全てを与える。加えて，牛2頭，鶏，豚および通称「オーチャード・ロット」と呼ばれるノザムバーランドの町にある土地が与えられる。これらは彼女が亡くなり，指定相続人に移行するまで，彼女に帰属する。さらに彼女は私の死後，年金の手続きが行われるまでのつなぎ経費として，直ちに300ドルを受領する。その後，毎年600ドルが四半期ごとに分割して支払われる。

3．妻のメアリーには彼女の母親のメアリー・エルドレッジが同居している間，毎年100ドルが支払われる。母親が孫の誰かと同居する場合は，孫に毎年100ドルが支払われる。
4．指定相続人は，私の所有する不動産から賃料や利益を公平かつ定期的に回収すること。また，状況を見ながら最善の条件で売却することをゆだねられている。私が所有する不採算不動産は先行して売却し，すべての不動産は私の死後10年以内に処分すること。ただし，状況が悪化し条件が悪くなることを避けるため，10年を待たず出来るだけ早く売却することが望ましい。
5．指定相続人は，私の死後速やかに財産と負債を調査し，同一の会計帳簿に記載すること。
6．私が死亡した時まだ幼い息子たちは，自立する年令に達するまで，年間200ドルを与えられ，娘たちは年間150ドルが自立するまでか結婚するまで与えられる。
7．負債，葬儀費用，妻と妻の母親への年金，年少の子供たちへの養育費と教育費，これらの費用が支払われた後で，不動産の賃貸料や利益は指名相続人によって，年少のこどもたちが自立または結婚するまで補助が期待できるよう，そして男女，年齢を問わず全ての子供たちに等分に分与されるようにその都度運用される。
8．私はこの最新の遺言書で息子のサムエル，アンドリューおよびジェームスの三人を共同指名相続人とする。

ジェームスは1817年1月4日に亡くなり，ノザムバーランドの墓地に埋葬され，彼の遺言書は1月22日にサンバリーの登記所で検認が行われた。妻のメアリーはウィリアムスポートにいる未婚の二男アンドリューと住むため，新しく家を建てて同地へ移った。彼女はその9年後の1826年5月1日，65歳で亡くなった。同町のワシントン通りの息子一

家の墓地で眠っている。

二人には以下の6男3女が授かった。

第1子　Samuel（Nov. 5, 1782～Oct. 16, 1865）プリンストン大学卒業，弁護士

第2子　Andrew D.（May 23, 1786～Mar. 6, 1861）実業家

第3子　William（May 23, 1786～Sep. 22, 1800）夭折

第4子　James（May 19, 1789～Dec. 25, 1855）弁護士，経営者

第5子　John（Oct. 8, 1792～Jan. 1838）不明

第6子　Jane（Mar. 19, 1795～May 17, 1867）弁護士と結婚

第7子　Mary（May 6, 1797～Jun. 3, 1825）弁護士と結婚

第8子　Hopewell（Oct. 28, 1799～Feb. 4, 1863）プリンストン大学卒業，弁護士・判事

第9子　Sarah（Sep. 10, 1801～Feb. 20, 1829）弁護士と結婚

4．大叔父ウィリアム・ヘップバーン

ジェームスの次弟，ウィリアムはペンシルバニア州ウィリアムスポートを拠点に，治安判事，実業家，農場主，地主，州議会上院議員そして州裁判所長官を歴任し官・民にわたり広い分野で活躍し，兄ジェームスと共にアメリカにおけるヘップバーン一族の繁栄を築いた人物であった。彼はヘボンが6歳になるまで生存していたので，ヘボンも直接逢った可能性がある。

彼はアイルランドのドニゴール州で1753年に生まれ，1821年6月25日にペンシルバニア州ウィリアムスポートで死去した。享年68歳であった。ウィリアムは前節で触れた通り，1773年に兄のジェームスとともにアメリカに渡って来た。この時，二人は，同じドニゴール州出身で，既にアメリカにおいて不動産事業に成功していたアンドリュー・カ

ルバートソン（Andrew Culbertson）の世話になり，彼の案内でサスケハナ渓谷を視察した。ウィリアムはその時直ちに，入植者に小麦粉を供給する製粉工場の必要性を感じ，製粉機の動力源となる急流と大きな落差のある河口の地を選んで住まいを構えることにした。そこはDuBoistownと称し，現在のウィリアムスポートの西部地区向かいの地域に当たる[18]。

1777年，ジェームスはニュージャージー州出身でロイヤルソック・クリーク（Loyalsock Creek，PA）に住むクレイシー・コベンホーベン（Crecy Covenhoven）と結婚した。翌年の8月に長女が生まれたが，前年から同地にイギリス軍の侵入が始まったため，彼はウィリアムスポート西方10マイルにある，フォート・マンシー（Fort Muncy）の部隊本部に入隊した。彼は大尉（Captain）としてイギリス軍・王党派と戦ったが，生命の危険と凄惨な場面に何度も出くわした。幸い，1779年にはイギリス軍が撤退し，ウィリアムは生きてロイヤルソックに戻ることができた。彼はしばらくのちに，現在のウィリアムスポートのダウンタウンに近い300エーカー（36万坪）の土地を購入し，ディヤー・パーク（Deer Park）と名付け，ここに「ログハウス」を建てて亡くなるまで住み続けた。

ウィリアムは1789年にペンシルバニア州最高執行委員会会長のトーマス・ミフリン（Thomas Mifflin）から，二つの町の各々7ヶ年任務の判事に任命され，1791年には州知事に当選したミフリンから改めて治安判事の任命を受けた。この頃，ウィリアムスポートの人口が増え始めたことから，ウィリアムは雑貨店を開業した。当時，兄のジェームスはノザムバーランドでHepburn & Cowden商会を軌道に乗せていたことから，種々ウィリアムに経営の方法をアドバイスした。一方，この頃農家は穀物の流通が滞り収入が減少していたことから，醸造業を始めるところが急増した。ウイスキーは最も採算の良い生産物であった。

ウィリアムはその後，事業に成功するとその利益を不動産事業に投資し，1800年までウィリアムスポート周辺の土地購入を大々的に行った。その間に州上院議員，ライカミング郡裁判所長官に就任した。1800年4月8日に妻のクレイシーを失い，一歳に満たない幼子を含む3男7女が残された。ウィリアムはほどなくして，ペンシルバニア州最高裁判所長官のチャールズ・ヒューストンの妹エリザベスと再婚した。その後，彼は退役将校，判事，商人そして農民と全てに充実した生活を送り，1821年6月25日にウィリアムスポートの自宅で亡くなった。68歳であった。ウィリアムはヘップバーン家伝統の長老教会の信仰に篤く，ライカミング長老教会に出席し長年奉仕した。

エリザベスとの間には4男5女が与えられた。ウィリアムは先妻のクレイシーの子と合わせ，19人の子だくさんであったが，彼には兄ジェームスを上回る莫大な遺産があった。その処分については細かい遺書を弁護士に託し，それは息子のサムエル，ウィリアムおよびジェームスの三人の指定相続人によって，遺族に遺言通り配分された。

5．大叔父サムエル・ヘップバーン，Jr.

ジェームスの三弟サムエルJr. はアイルランドのドニゴール州で1755年に生まれ，1773年に父サムエルと弟のジョンと共にアメリカに渡ってきた。兄ジェームスにしたがって，フィラデルフィア，つづいてノザムバーランドに転居後，1800年頃開設されて間もないペンシルバニア州ミルトンに入植し，まず一軒の雑貨店を開いた。この店はミルトンで最初の商店の一つであった。彼はミルトンに移る前の1791年にエディス・ミラー（Edith Miller）と結婚した。

サムエルJr.は兄たちと同じく商才があり，サンバリーの記録簿倉庫には＄7,000ドルを超える額の財産目録が残されている。

ヘボンの父サムエルがミルトンに定住するきっかけを与えたのも，このヘボンの大叔父サムエルであった。彼は1801年12月4日にミルトンで亡くなり，ノザムバーランド墓地の父サムエルの隣りに埋葬された。46歳であった。その後，しばらくの間，妻のエディスによって店は継続されたが，彼女はSamuel Erwinと再婚し，ニューヨーク州に移った。二人に子はなかった。

6．大叔父ジョン・ヘップバーン

ジェームスの末弟ジョンは1757年にアイルランドのドニゴール州に生まれ，父サムエルと兄のサムエルJr.と共にアメリカに渡った。そして，既に触れたように1775年アイルランドに残っていた母と姉を迎えに行き，アメリカに戻る際に乗船したFaithful Steward号が難破し，本人は助かったが母と姉を失った。

1790年頃Mary Elliottと結婚し，一時ミルトンに住んだが，やがてサスケハナ町に転居し新たに住居を構えた。ジェームスは1814年に，メアリーは1819年に同地で亡くなった。彼らには3男3女が与えられ，二男のサムエルは土木技師として成功し，三男のジェームスはアイオワ州に移住して，地元の名士となった。

7．父サムエル・ヘップバーン

ヘボンの父サムエルは1782年11月5日に生まれた。『系譜書』によると，この頃彼の父親のジェームスは不動産取引で家を空けることが多く，母親のメアリーは実家のニュージャージー州マウント・ホリーに帰り，そこでサムエルを産んだとしているが，注で「サムエルの息子のカーティス〔ヘボン〕は，父の生地をフィラデルフィアとしている」と

断っている。どちらの説が正しいかは，もちろん判断出来ないが，感覚的には当時の状況から見て，母親の実家で生まれたとする方が妥当のように思われる。

サムエルはその後，一家が転居したノザムバーランドで成長し，地元で初・中等教育を受けた後プリンストン大学に進学し，最優秀の成績で同大学を卒業した。彼は帰郷するとJ.H.ウォルカー（Jonathan H. Walker）の下で法律を学び，1800年にサンバリーで弁護士登録をした。その頃，叔父のサムエルとジョンが住むミルトンに転居し，そこでミルトンで二番目となる弁護士事務所を開いた。叔父のサムエルは，この地で手広く商売を行っていた。1811年12月21日，監督教会（Protestant Episcopal Church，日本では聖公会）の牧師スレター・クレイ（Rev. Slator Clay）およびハナ・H・クレイ（Hannah Hughes Clay）の娘である，アン・クレイ（Ann Clay）とモントゴメリービル（Montgomeryville, PA）でクレイ牧師の司式で結婚式を挙げた。アンは1788年3月16日生まれの23歳であった。彼女の父親は当時，ペンシルバニア州ノリスタウン（Norristown）近くの小村パーキオメン（Perkiomen）のSt. James Episcopal Churchで牧会に従事していた[19]。後日，ヘボンはペンシルバニア大学医学部を卒業した後，ノリスタウンで医院を開業するが，この地はクレイ家と何らかの縁があった可能性もある。もう一点，こちらは偶然と思われるが，ヘボンとクララ・リートとの出会いの場所となったのが，このノリスタウンの町であった。

ヘボンは後年，牧師の娘である母親から多くの宗教的感化を受けたと述懐しているが，何故か彼女の父親，つまり母方の祖父が牧師であったことには触れても，監督教会の牧師であったことには言及していない。母アンは父サムエルと結婚後，監督教会から長老教会に転籍したと思われるが，この点は日本のプロテスタント教会形成期における超教派主義と教派主義の葛藤の中で，ヘボンが示した態度を考える時，かなり重要

な意味が含まれているように思われる。

ここでは，詳しく触れる余裕はないが，それは，1872年9月20日から25日まで，横浜居留地39番のヘボン邸で第一回在日プロテスタント宣教師会議が開催された際，教会形成を巡って超教派主義と教派主義の議論が生じ，ヘボンは当初教派主義を唱え，のちに超教派主義に賛同した経緯があるからである。

父サムエルに戻ろう。彼の事務所はその後，ミルトンの町の発展とともに大きくなり，仕事も忙しくなってきた。また，ノザムバーランド，ライカミング，モンツアー，コロンビア，ユニオン，センターおよびクリントンの近隣各郡のかなり広範囲の巡回判事を務めた。1815年，この年はヘボンの誕生した年でもあるが，サムエルは母校プリンストン大学からマスター・オブ・アーツの学位を受領した[20]。彼は1795年に祖父サムエルから，次いで1817年には父ジェームスから遺産分けを受け，生計は極めて富裕であった。サムエルの性格は誠実で本当の紳士であり，実直でかつ温和であった。社交はあまり好まず，家庭を第一とした。職業上，政治的見解を述べることもあったが，政治家として議会を目指すというような野心はなかった。ミルトンでは，地元長老教会の長老として長く奉仕活動を続け，常に篤い信仰を守り続けた。

こうして見ると，ヘボンの性格形成は父ジェームスからの影響が誰よりも大きかったことがわかる。ヘボンは青年期に進路を巡って父と確執の時期を持ったが，それは性格の似た者同士に良く見られる事象であったように思われる。

ジェームスは45年間ミルトンに住み続けたが，1856年に二人の娘たちが住むロックヘブンの町へ妻とともに転居した。そして，ジェームスは1865年10月16日に，妻のアンは同年12月5日に同地で亡くなった。当時，横浜にいたヘボンは，この年，立て続けに両親を失ったのであった。

二人の間には以下の2男6女が与えられた。ヘボンの兄弟姉妹たちである。

第1子　Hannah Maria（December 25, 1812～June 1878）
第2子　James Curtis（March 13, 1815～September 21, 1911）
第3子　Sarah（June 2, 1817～April 24, 1886）
第4子　Slator Clay（October 19, 1819～March 27, 1895）
第5子　Mary（May 1, 1822～ ?）
第6子　Emma（July 22, 1825～October 5, 1860）
第7子　Louisa Harriet（March 7, 1828～ ? ）
第8子　Jane（December 2, 1830 ～August 13, 1872）

8．叔父アンドリュー　D・ヘップバーン

ヘボンの父サムエルの次弟アンドリュー・ドツ・ヘップバーン（Andrew Doz Hepburn）は，ノザムバーランドで1784年3月10日に生まれた。地元で教育を受け，早くから父ジェームスの店で働き経営能力を磨いていた。18歳の時，ウィリアムスポートの父の所有する300エーカーの土地の管理を任されて同地に移った。その隣地には叔父ウィリアムが所有するDeer Park farmがあった。彼はウィリアムスポートに着くとすぐに住いを建て，雑貨店を開いたが，これは町で二番目の商店であった。この店はパブリック・スクエアーとマーケット・ストリートの北西角に位置したが，1813年9月2日，父と母からこのロットを譲り受けた。19歳の時にマルサ・ヒューストン（Marth Huston）と結婚した。彼女はペンシルバニア州最高裁判所長官のチャールズ・ヒューストンの妹で，また叔父ウィリアムの2番目の妻となったエリザベス・ヒューストンの妹でもあった。ここにアンドリューは叔父と義兄弟の関係になった。

アンドリューは若くして商才を発揮し，大いに経営者として成功して

いったが，やがてウィリアムスポートの町のかなりの部分を含む大きな土地を購入し，不動産事業に乗り出した。1815年にはヘップバーン・ストリートの西側部分を集中的に購入し，自ら“Hepburn's Addition”（ヘップバーン地区）と命名した。こうしたアンドリューの手腕が評価されて，彼は郡の会計主任に任命を受け1806年から1808年まで務めたが，この時まだ弱冠24歳であった。その後も，近隣の町の行政区画整備，幹線道路の計画等に郡の仲裁人・委員として任命され，またサスケハナ河流域の農産物を東海岸の諸都市に運搬するため，河川運搬設備の整備に努力し，特に地元に取って重要であったウエスト・ブランチ運河（The West Branch Canal）の建設には，全面的にアンドリューの意見が反映された。

アンドリューは実業家であるとともに神学の研究者でもあった。祖父サムエルからの長老教会の信仰上の伝統を引き継ぎ，研究は神学者以上に深く，教職者たちも彼の書斎に入るのに二の足を踏んだと言われる。彼はウィリアムスポート第一長老教会の創立を推進し，教会建設のための用地を献納した。そして，最初の二人の長老の一人となり，日曜学校の校長も引き受けて長く奉仕活動を続けた。ヘボンがこの叔父のことについて書き記したものを見たことはないが，神学研究および積極的な信仰生活は，甥のヘボンに影響を与えた可能性は大きいように思われる。

アンドリューは1852年2月6日に妻のマルサを亡くした。彼女は66歳であったが，結婚生活は50年以上に及びかなりの寂寥をアンドリューに与えた。彼はその9年後の1860年8月3日に76歳でなくなった。膨大な土地が残され，遺言によって息子二人が指定相続人に選ばれ処分が行われた。夫妻はワシントン通りのウィリアムスポート墓地に眠っている。

二人には以下の7男3女が授かった。彼らはヘボンの従兄弟，従姉妹たちであるが，従姉妹の何人かは医師と結婚しており，ヘボンの周囲に

同世代の医師がいたことがわかる。

第１子　James（September 11, 1803～July 30, 1853）

第２子　Mary（September 30, 1805～January 13, 1853）医師，James Rankin Muncyと結婚

第３子　Samuel（November 26, 1806～？）

第４子　Janet（November 29, 1806～？）

第５子　Martha（October 28, 1810～？）　医師，Thomas Wood Muncyと結婚

第６子　William（December 1812～October 5, 1855）

第７子　Andrew（December 15, 1814～June 10, 1872）

第８子　Charles Walker（March 9, 1819～September 19, 1844）

第９子　Hopewell（March 29, 1821～July 4, 1844）

第10子　Thomas（？～August 8, 1873）

第11子　Sarah（？）医師，William Hayesと結婚。

９．叔父ジェームス・ヘップバーン

ヘボンの父の３番目の弟であるジェームス・ヘップバーンは，1789年5月19日にノザムバーランドで生まれた。

ノザムバーランド・アカデミーでRev. Isaac Grierに指導を受け，その後ミルトンに移りヘボンの父である長兄のサムエルに法律を学び，1819年8月19日，サンバリーの法廷に弁護士登録を行った。有能な弁護士として知られるようになったが，彼の才能は経営にも発揮され，やがてノザムバーランド銀行の頭取に指名された。また1830年から1838まで地元の土木会社社長を務めた。

1840年にノザムバーランドを離れボルチモアに移り，Tide Water Canal Companyの社長に就き，生涯この事業に精励した。そして，経

営者を退くとフィラデルフィアに転居し，再び法律事務所を開いた。1855年に姪の夫でもある，ペンシルバニア州知事ポロックから州法律顧問（State Law Reporter）に任命された。その後間もなく，ジェームスは体調を崩し1855年12月25日，フィラデルフィアで亡くなった。妻マリア（Maria Hiatt）との間に２男７女を与えられた。

第１子　Mary（November 19, 1811～September 7, 1856）
第２子　James（August 17, 1813～February 19, 1837）
第３子　Hiatt Park（February 16, 1815～May 1, 1864）
　　サンフランシスコで代表的な弁護士となった。
第４子　Sarah Jane（June 20, 1816～May 11, 1842）
第５子　Ann Eliza（June 7, 1818～January, 1845）
第６子　Harriet（November 19, 1821～？）
第７子　Lydia Louisa（April 19, 1828～September 29, 1829）
第８子　Emma Maria（October 9, 1831～August 26, 1892）
第９子　Caroline（June 16, 1835～April 15, 1891）

10. 叔父ホープウエル・ヘップバーン

ホープウエルは，ヘボンの父サムエルの５番目の弟で1799年10月28日，ノザムバーランドで生まれた。ノザムバーランド・アカデミーからプリンストン大学に進み，卒業後，兄のサムエルのもとで法律を学び1822年もしくは1823年にイートン（Easton, PA）で弁護士の登録をし，同地に法律事務所を開いた。ホープウエルは1844年９月17日に，ピッツバーグ地方裁判所の副判事に任命を受け，イートンからピッツバーグへ転居した。一時は州裁判所の長官選挙に立候補し落選を経験後，ピッツバーグで法律事務所を開いた。1859年にはAllegheny Bankの頭取に推薦され，３年間その職を務めた。その後，健康を害しフィラデルフィ

アに移り，その地で1863年2月14日に死去した。子は2男4女がいた。

11. 姉ハンナ・ヘップバーン

ヘボンの姉ハンナは，1812年12月25日にミルトンで生まれた。ヘボンより2歳半の年長であった。1835年6月8日，メリーランド州の農場経営者ウィリアム・ヘンリー・ブラッキストン（William Henry Blackiston）と結婚した。ヘボン夫妻が1872～1873年にかけて本国に一時帰国した時には，この姉夫婦の家も訪ねている[21]。ハンナは1878年7月に同地で亡くなった。夫妻は3男6女を得たが，弟の名スレーターと名付けた三男は監督教会牧師となり，また娘の一人は弁護士と結婚した。

12. 妹サラ・ヘップバーン

ヘボンの直ぐ下の妹のサラは，1817年6月2日にミルトンで生まれた。1837年12月19日，ミルトンでジェームス・ポロック（James Pollock, September 11, 1810 ～ April 19, 1890）と結婚した。夫となったジェームスは既に触れたように，ヘボンの医学上の師サムエル・ポロック医師の弟で，後にペンシルバニア州裁判所長官，連邦議会上院議員，ペンシルバニア州知事および連邦造幣局局長を務めた名士であった。彼は連邦政府銀貨に“In Got We Trust”と彫らせたことで，アメリカでは良く知られた人物である。その信仰は篤く，American Sunday School Unionの副会長として1855年から亡くなるまで奉仕活動を続けた。サラは，1886年8月24日にフィラデルフィアで亡くなった。享年70歳であった。夫妻ともにミルトン墓地に埋葬されている。夫妻には3男4女が与えられた。

第1子　Samuel Hepburn（October 23, 1838～October 25, 1865）

第２子　William Curtis（August 30, 1840～1920）
第３子　Louisa Ann（August 11, 1842～？）
第４子　Emily Clara（February 22, 1845～July 6, 1846）
第５子　James Crawford（November 29, 1847～1908）
第６子　Sarah Margaret（March 20, 1850～？）弁護士のHenry Thomas Harveyと結婚。
第７子　Emma（March 22, 1853～？）弁護士のCharles Crossと結婚。

13. 弟スレーター・クレー・ヘップバーン

ヘボンの唯一の兄弟であるスレーターは，1819年10月19日にミルトンで生まれた。ヘボンとは4歳半の違いであった。ミルトン・アカデミーで校長のデビット・カークパトリック師（Rev. David Kirkpatrick）に指導を受けた後，プリンストン大学に進学し在学中の22歳の時，ミルトンの長老教会で信仰告白を行った。1839年に同大学を卒業すると父の下で法律を学んだが，18ヶ月後に牧師になる決意を固め，1841年にプリンストン神学校（Princeton Theological Seminary）に入り，3年間のフルコースを修了し1844年に卒業した。神学生時代の1843年5月25日，ノザムバーランド長老会（中会）で准允を受け，神学校卒業後の1845年1月21日に同長老会で按手礼を受領した。神学校を卒業後，ロックヘブン（Lock Haven, PA）のグレート・アイランド教会（Great Island Church）で奉仕し，按手礼を受けた後はそのまま牧師に就任し，1850年6月11日までその職を務めた。

その後，ニューヨーク州オレンジ郡キャンベル・ホールのハンプトンバーグ長老教会（The Presbyterian Church of Hamptonburgh）の牧師に招かれ，1850年7月2日に着任した。その間の1849年9月12日にヘボン夫妻の世話で，アンナ・マリア・ボイド（Anna Maria, daughter

of Samuel and Anna Maria Boyd, of New York City）と結婚した。この結婚の経過は『ヘボンの手紙』で詳しく知ることが出来る。

また，ヘボンはスレーター宛ての手紙では，結びに必ずアンナやアンナの母親ボイド夫人に宜しくと書き，のちに息子のサムエル・ボイドが生まれると彼の名も書き加えて，親愛の情を示した。

スレーターは世代を超えた教会員から尊敬と親しみを受け，45年間同じ教会に奉仕を続け1895年3月27日，脳卒中により死去した。76歳であったが，2ヶ月前には按手礼受領50周年の祝会が行われたばかりであった。日付け，学位の分野および授与大学が確認出来ていないが，博士号を受領している。妻のアンナは1897年5月30日に亡くなった。ニュージャージー州イースト・オレンジのローズ・デール墓地に埋葬された[22]。夫妻には男子一人が与えられたが，親の意に反し教職には就かずセントラル鉄道会社に勤め，出世してかなりの財をなした。ヘボンは「サラとか君とわたしなど，いずれも息子をよく育て上げたとは考えられません。しかしこの話は時間がかかる問題ですからやめます」[23]とスレーターに書き送っているが，姉，本人および弟のスレーターがそれぞれ信仰心の薄い息子を持ったことを嘆き悔やんでいる様子が見られる。尤も，姉ハンナのところで触れたが，彼女の三男のスレーターは牧師になっている。

Samuel Boyd（February 6, 1854～May 24, 1932）

妻　Sarah Booth

長女　Anna Bayard Hepburn（1886～？）

二女　Amy Lourie Hepburn（1888～1966）コロンビア大学図書館司書

三女　Dolly Booth Hepburn（？～March 19, 1976）コロンビア大学図書館司書・人事部長

高谷道男は1956（昭和31）年にアミーとアメリカで会い，1962（昭

和37）年にドーリーが仕事で来日した時に親しく面談し，その後両女史と長く文通した。やがてドーリーからヘボン直筆の私信を受領し，これを和訳して刊行したのが『ヘボンの手紙』である。同書の「はじめに」に，その経緯が詳しく書かれている。

14.　妹メアリー・ヘップバーン

ヘボンの次妹のメアリーは1822年5月1日，ミルトンで生まれた。1840年代にミルトン出身で，ロックヘブンで弁護士を開業していたルイス・A・マッケー（Louis A. Mackey, November 25, 1819～ February 8, 1889）と結婚した。同地には妹のルイザ・ハリエットもエドワード・マクルア（Edward McClure）と結婚し住んでいたことから，1856年に両親が二人の娘夫婦のもとにミルトンから転居して来た。マッケーはその後，ロックヘブン銀行の頭取となった。同じ頃，1870年にロックヘブンが市に昇格した時，最初の市長となり3年間その職にあった。ところがロックヘブン銀行は1877年に破産となり，ヘボンや弟のスレーターたちにも少なからず損害を与えた。『ヘボンの手紙』には「さてロックヘブン銀行が閉鎖したことは，君もわたしもその他，多くの人々も残念なことです。君の損害の方がわたしのものより遥かに大きいのでお気の毒です。わたしはわずか十株しかもっていなかったから。あわれなマッケー！　何といういたましい結末であろう。しかしもしこの失敗が，マッケーだけですむなら，それはかえって大きい祝福となり，それほど心配することはありません」とあり，ヘボンはマッケーに同情と激励を与えている[24]。しかし，直接銀行の倒産とは関係のない妹婿の飲酒癖に対し，「マッケーが飲酒癖を改めないことを君から聞いて悲しく思います。何となさけないわたしどもの義弟の身の上でしょう。彼らはこの世代の人々のよい見せしめです」[25] と厳しい言葉も発している。

ヘボンは後年になってもこれら義弟たちは気になっていて，1886年11月9日付け書簡ではスレーターに，「ポロック氏のやっている政府の役職はどんなですか。マッケーは禁酒していますか。彼の消息を知らせて下さい」と照会している[26]。マッケーはその後，地元のBald Eagle Valley Railrordの建設を推し進め，10年間同地の鉄道会社の社長を務めた。1889年に70歳で死去した。妻のメアリーと娘二人が残されたが，娘二人はそれぞれロックヘブンの医師と結婚している。

15. 妹エンマ・ヘップバーン

ヘボンの三妹のエンマは1825年7月22日，ミルトンで生まれた。1849年1月3日付けヘボンのスレーター宛ての手紙に，「エンマが近々ホーガン・ブラウン（Hogan Brown）という海軍士官と結婚するが，彼女の子供の頃の希望と違った縁談に同情する」という文章が出て来る[27]。文面から推測するとヘボン夫妻は，その後フィラデルフィアで行われたエンマの結婚式に出席したと思われる。

同じく，1860年7月17日付けの手紙で，「父から痛々しい手紙を受け取りました。それによるとエンマは胸のガンをわずらって，回復できないほど病勢が進んだとのことで，とても心配しています。その後の経過をもっと詳しく知りたいのですが，故郷からのその後何の便りもありません。大変心配して手紙のくるのを待っています。わたしどものエンマ，わたしは彼女のことを思うと心が痛みます。彼女が宗教による慰めを得，堪え，励ましを受けるようにと願っています。また，この苦難によって，彼女とわたしどもすべてのものが，神から祝福されるよう願っています。どうか君が手紙を書くとき，いつも，わたしどもの家族について，君の知っているすべてを伝えて下さい。母はそうたびたびわたしどもに手紙を書きませんし，父はさらに筆不精です。いわんや他の親戚

のものに至ってはやむを得ません」[28] と遠い地にいるもどかしさを弟に訴えている。そして，1861年3月1日の手紙では彼女の死を悼む言葉が連ねられている[29]。エンマは前年10月5日に，35歳の若さでこの世を去っていたのだった。故国を離れ，兄弟姉妹の不幸に何も出来ないヘボンの悲しみが文面に溢れている。

16. 妹ルイザ・ヘップバーン

ヘボンの四妹になるルイザは1828年3月7日，ミルトンで生まれた。ロックヘブンに住むエドワード・マクルア（Edward McClure）と結婚した。1959年8月31日付け上海発信の『ヘボンの手紙』[30] には「本日ルイザは父君と子供同伴で，私どもを訪ねてくれました。わたしは外出していましたが，妻の話では，ルイザはあまり変わっていなかったそうです。わたしの妻と会って喜んだそうですが，ルイザはいま，真実のキリスト信者として成長してきました。ローマン・カトリックの人々に加わっていたが，今はその関係をたっているということでした」と，信仰上の興味深い記述が見られる。この文章から，ヘボンがローマ・カトリックを認めていなかったことがわかる。ルイザの夫マクルアは外交官や教職者ではないので，上海にいる点から推測すると，貿易に携わっていたようである。その他，二人がロックヘブンに住み続けたこと以外は詳しいことは不明である。

17. 妹ジェーン・ヘップバーン

ヘボンの末の妹ジェーンは，1830年12月2日にミルトンで生まれた。ヘボンとは15歳の年齢差がある。彼女は医師のH. C. Lichtenthalerと結婚し，1872年8月13日に死去した。41歳であった。

おわりに

近年，ヘボン研究は，従来の日本における働きを中心とするものから，ヘボンの生涯全体を描こうとする新しいアプローチが試みられてきている。それは，ヘボンの先祖，生まれ育った故郷のペンシルバニア州サスケハナ河地域，アジア伝道，ニューヨーク市での病院経営時代，日本から帰国し晩年を過ごしたニュージャージー州イースト・オレンジ等を実地調査し，ヘボンの人間形成の背景や晩年の生活の中に，引き続き日本が生きていたことなどを史料によって，検証・考察しようとするものである。その努力は，佐々木晃「ヘボンの中国伝道（上）」（本研究所『紀要』第30号，1998年）および同「ヘボンの中国伝道（下）」（本研究所『紀要』第31号，1999年）から始まって，司馬純詩「アジアが遠くにあった頃 ―ヘボンのアメリカ―」（本研究所『紀要』第42号，2009年），渡辺英男「イースト・オレンジにおけるヘボン」（本研究所『紀要』第44号，2011年）へとつながっている。

本稿は，こうしたヘボン研究の新しい試みに合わせ，ヘボンの遠祖から彼と同時代を生きた「ヘボン家の人々」を描いたものであるが，そこではヘップバーン一族に流れるスコットランド長老教会の伝統的信仰，実業社会における優れた商才，法曹界および医学界との血縁の広がり等幾つかの特徴が顕著に見られ，ヘボンはこうした家庭環境の中に育ち，その過程で周囲から様々な影響を受けながら人間形成が行われていったことが，かなり明確に出来たのではないかと思う[(31)]。

例えば，ヘボンが最初にアジア伝道を志した時，両親をはじめ親類縁者はことごとく反対したと言われているが，実際に反対した人々がどのような人々であったのかは不明であった。しかし，本稿の成果としてヘボンの周囲の人々を確認できたことにより，これだけの人々の反対の

中，敢えてヘボンがアジア伝道に出発したことは，ヘボンの内なる召命感，加えて妻クララの精神的支えがあって始めて実行可能であったことを，改めて知らされるのである。

注

（1） 飯島啓二『ノックスとスコットランド宗教改革』（新教出版社，1976）p25.
また，井深梶之助「宣教師としてのイムブリー博士」『井深梶之助とその時代　第一巻』p369に「先生の幼少時代乃至は青年時代の事は，遺憾ながら私は能く詳知しません。前述の如く，私は数十年の間，親しく交ったのにもかかわらず，先生が自分の少青年時代の事に就いて多く語られたことを記憶しません。（中略）先生は生来非常に謙遜なる人で，かりそめにも自分の手柄談の如き事を人に語るを好まれなかったためであります」とある。インブリーもまたヘボン同様，先祖はスコットランド人であった。

（2） 高谷道男編訳『ヘボンの手紙』《増補版》（有隣堂，1878）p222. 傍点省略。

（3） William Eliot Griffis（1843~1928）1869年，アメリカ合衆国ニュージャージー州ラトガース大学を卒業して，1871年福井藩のお雇い理学教師として来日。翌年，大学南校の教師となり1874年に帰国。帰国後は牧師をしばらく務めたのち著述業に転身した。

（4） 高谷道男編訳『ヘボン書簡集』第四刷（岩波書店，1979）pp 292～293.

（5） W. E. Griffis, “*Verbeck of Japan*”, New York; F. L. Revell Co., 1900.

（6） John F. Meginness, “*GENEALOGY AND HISTORY OF THE HEPBURN FAMILY OF THE SUSQUEHANNA VALLEY, WITH REFERENCE TO OTHER FAMILIES OF THE SAME NAME*” WILLIAMSPORT, PA: GAZETT AND BULLETIN PRINTING HOUSE, 1894.

（7） Joseph Bucklin Bishop Litt. D. A “ *Barton Hepburn, His Life and*

Service to His Time", New York; Charles Saribner's Sons, 1924.

（８） 前掲注（6), p5.

（９） 同上，p6.

(10) 前掲注（1)，p238.

(11) ボスウェル伯がスコットランド王国を支配するため女王の監禁を図ったとされる事件。

(12) 城内の牢で発狂した等の諸説があり，死亡日も1578年4月14日とする文献もある。

(13) 1705～1775年の間に，アメリカに移住した北アイルランド出身者（ほとんどが長老教会信徒）は，少なくとも50万人を超え，主としてニュージャージー州およびペンシルバニア州を中心に入植した。Walter L.Lingle, Revised by T. Watson Street, "*Presbyterians, Their Historyand Beliefs*", Richmond, Verginia; John Knox Press, 1971参照。

(14) ペンシルバニア地域やニュージャージー地域は1787年に合衆国に加入したが，本稿では植民地時代も含め便宜上，「州」と表記した。

(15) 司馬純詩「アジアが遠くにあった頃 ―ヘボンのアメリカ―」『紀要』第42号，（明治学院大学キリスト教研究所，2009年）pp 165～166.

(16) 1793年までペンシルバニア州ではポンドが通貨として使用されていた。

(17) 岡部一興編『ヘボン在日書簡全集』（教文館，2009年）p365. ヘボンは，「父はフィラデルフィアで生まれた」と述べている。サムエルのプリンストン大学卒業生ファイルの記録にも生地はフィラデルフィアとある。

(18) ウィリアムはウィリアムスポートの創設者二人の恩人のうちの一人として，同市の記録に残されている。Hunsinger, Lou Jr. "William Hepburn: Father of Lycoming County", Williamsport Sun- Gazette.

(19) Slator Clay（October 1, 1754～September 25, 1821）長く奉仕したSt. James Episcopal Church, Collegeville, Montgomery Co. PAの附属墓地に墓があり，墓碑には"SACRED TO THE MEMORY OF THE REV. SLATOR CLAY FOR NEARY 35 YEARS RECTOR OF ST. JAMESCHURCH, PERKIOMEN ST. PETERS, GREATVALLEY AND SWEDES CHURCH UPPER MERION WHO DEPARTED THIS LIFE

SEPT 25TH AD 1821 AGED 67 YEARS”と刻まれている。

(20) プリンストン大学卒業生ファイル。Princeton University Mudd Library.

(21) 前掲注（2）p114. 1873年7月12日付け書簡。

(22) ヘボン一家のロットとは別に，スレーター一家の墓地がある。

(23) 前掲注（2），p136. 1878年8月21日付け書簡。

(24) 同上，p125. 1877年12月12日付け書簡。

(25) 同上，p140. 1879年10月31日付け書簡。

(26) 同上，p218.

(27) 同上，p17. 1849年1月3日付け書簡。

(28) 同上，pp66～67. 1860年7月17日付書簡。

(29) 同上，pp69～70. 1862年3月1日付け書簡。

(30) 同上，pp40～41. 1858年8月31日付ケ書簡。

(31) ヘボンの母アンは一人娘であったと思われ，従って母方の親類縁者は少なく，また教派的にも監督教会に所属していたことから，ヘボンに対して身内として影響を与えた人物はほとんどいなかったと思われる。祖父クレイ牧師も1821年に亡くなっているので，1815年生まれのヘボンとの接触の時間は限られていた。

尚，注としてはやや長いが，ヘボン夫妻の一人息子のサムエル（Samuel Dyer）にも触れて置きたい。彼は1844年4月9日，ヘボンの任地である清国アモイで生まれた。翌年11月30日，マカオを出航し1846年3月15日にニューヨークに着いた。1859年2月2日，ヘボン夫妻の日本赴任に伴いニュージャージー州エリザベスのヤング宅に預けられた。まだ14歳であった。ヤング宅では徐々に同氏と意見の相違が生じ，しばしば体罰を加えられる事態となり，弟のスレーターが一時サムエルを引き取り育てた。1862年頃プリンストン大学に入学したが，勉強に身が入らず1864年に同大学を退学し，1865年8月，日本に住む両親のもとに合流した。横浜居留地39番の宣教師館に両親と住み，Walsh & Hall Co’s Yokohamaに月給40ドルで職を得た。1873年10月16日にClala E. Shaw（1855～1930）と結婚した。1878年頃は，横浜山手に住み日本郵船に月給170ドルの高給で迎えられていた。当時は，横浜居留地のベース・ボール・チームのエースとして活躍し，のちに会長に就任している（原豊の調査による）。翌年には東京に転勤の話があったよう

であるが，実際に赴任したか否かは確認出来ていない。

1882年には横浜山手でヘボン夫妻と隣り合わせに住んでいたが，勤務先はスタンダード石油の横浜支店主任で俸給にも恵まれていたとヘボンは書いている。1886年5月13日付け書簡では，「サムはまだ日本郵船に勤務して生計を営んでいます。かなりよい俸給を得ておると思いますが，わたしは知りません」とあるが，ここで日本郵船と言っているのはスタンダード石油の間違いかと思われる。

ヘボンは1892年10月22日に妻クララとアメリカに帰国した。サムエルは1896年スタンダード石油長崎支店長となり，横浜を離れた。長崎に着任と同時にアメリカ領事館副領事に任命された。長崎には1908年4月に東京に転任となるまで滞在した。1910年12月定年退職となり，45年間の滞日を終えて本国に戻りカルフォルニアでひと時を過ごした。母のクララは在日中の1906年3月4日に亡くなり，父ヘボンも1911年9月21日に亡くなった。晩年は祖父や叔母たちのゆかりの地であるペンシルバニア州ロックヘブンで過ごした。1922年1月8日，同地で亡くなりHighland Cemeteryに埋葬された。77歳であった。サムエルの生涯はまさしくヘボンに翻弄された日々であった。妻のクララは1930年に死去した。二人に子はなかった。　了